

令和元年度 第4回 三重県総合教育会議 議事録（概要）

- 1 日 時 令和元年9月13日（水） 10:00～11:50
- 2 場 所 JA三重ビル 5階 大会議室
- 3 出席者 知事、教育長、教育委員4名
- 4 議 題 ・次期「三重県教育施策大綱」中間案について
・英語教育について
・プログラミング教育について
- 5 主な意見 ○：教育長・教育委員 ●：知事

<次期「三重県教育施策大綱」中間案について>

○「生き抜いていく力」は、国においても「学びに向かう力」とともに大事なものとして考えられている。「生きる力」よりも、たくましく生きていってほしいという願いが込められている。未来像が描きづらい時代に一人ひとりが自己実現をしていくためには、この「新しい時代を『生き抜いていく力』」という言葉はとても良いと思っている。その核となるのが、「自立」と「共生」の力であり、「共生」の中に「創る」という言葉が入っているのも良い。

「学びに向かう力」や「生き抜いていく力」は、幼少期から育てていくことが大事であり、具体的な施策を打ち出していくことが大事である。

○県民の皆さんに分かりやすく伝えるという観点から、概要は、キーワードを活用して見やすく、かつ、分かりやすくすると良い。

○人生の様々な選択をしていく中で、子どもたちの価値観を育むのに大きな影響を与えているのは、学校教育である。学校教育の中で学んだその先が、教育施策 9 の「地域の未来を創る多様な人材の育成」へとつながっていく。県民力を上げていく、県の経済を活発にしていくことが、結果的にそれぞれの生活や自分の人生のデザインを豊かにしていくことになる。

○三重県らしい大綱とするためにも、注釈について、もう少し三重県の情報を入れても良いと思う。

また、「教育に取り組む基本方針」についても、もう少し三重らしい表現を入れても良いのではないか。

○教育委員会は、施策の体系の幼児期から成年期まで全てに関連しており、現在策定中の次期の教育ビジョンと整合性を図りながら、記述を精査していきたい。

●内容については、大体ご了解いただいたと考えるが、県職員だけでなく、多くの県民の皆さんに実践いただくためには、分かりやすい表現でなければならないし、三重の

こと、自分たちの身近なことが、投影されている方が理解していただきやすい。
今日いただいたご意見は、まさに大綱の実践フェーズで、県民の皆さんや、関係の皆さんと一緒に進めていくために必要なことである。引き続き、分かりやすさ、三重ならではの打ち出し方について、しっかり検討していきたい。

<英語教育について>

- 英語教育やプログラミング教育を推進する方策として、教材や指導案の提供が中心となりがちであるが、本当に大切なことは、子どもたちや教員が、なぜ英語教育が必要であるかという意味や意義を理解し、その楽しさやメリットを体感することである。
- 三重県には外国人児童生徒が多くいることを前向きにとらえ、子どもたちが積極的に英語でコミュニケーションをとりあうような環境が生まれるとよい。教員に英語に対する苦手意識があると、それが子どもたちにも伝わり、良い雰囲気作りが難しくなって教育効果も高まらない。現場の声をしっかり聴いて、教員の苦手意識を解消するための支援を行ってほしい。また、小学校では子どもたちの習熟度が大きく異なる可能性もあることから、ICT等を活用し、一人ひとりのレベルに対応できる授業を実施すべきである。
- 初めて英語の授業に関わる教員自身のスキルやモチベーションが向上し楽しみながら授業ができるよう、外部人材やソフトウェア等を有効に活用すれば、子どもたちも楽しく学べるのではないか。
- スマートフォンによる自動翻訳や通訳などが一般的になっている中で、語学習得に対して必要性を感じない若者が増えている。また、母語（日本語）の語彙力が不足した状態で外国語を学ぶことによる弊害も指摘されていることから、英語教育を推進するためには国語力を高めることが欠かせない。小学校の英語では聞いたり話したりという楽しいコミュニケーション活動が中心であるが、中学校になると高校入試への対応の必要性から、文法や和訳中心の授業になりがちで、これが英語嫌いを生む要因の一つとなっている。
- なぜ英語が必要かを認識する必要性を改めて感じた。また、小学校のすべての学級担任が英語をできることを目標としている県もあるが、外部講師など地域の力も活用していくことはいいと思う。
- 子どもたちがチャンスを逸することがないように、常日頃から自己肯定感を持ってほしい。学校教育なので、正解のある領域が必要ではあるが、言語活動はそもそも絶対的な正解が存在しない領域であり、その習得のためには「答えのないものに挑戦する姿勢」が求められる。学習者の自己肯定感が高いと、正解のない課題に向き合う挑戦心も高まることから、学習者の自己肯定感を高めることが大切である。
- 日本語では細かなニュアンスまで伝えきれなかったことが英語では簡単に表現できたりすることがある。このように2つのチャンネルを持つことで豊かな生き方ができる。

このような実感を持つことができる機会を英語教育の中でつくるのが大切である。

<プログラミング教育について>

- 小学校でのプログラミング教育の主な目的は、論理的思考や課題解決力を育むことである。これは、これまでの授業の中で行ってきたことの一つであり、少し授業のやり方を工夫すれば、できることもある。たとえPCやタブレットなどのICT環境が整っていないなくとも、料理のレシピや折り鶴の正しい手順を考えたりするというアンプラグドの教授法により、その意義や意味を教えることができる。
- 環境整備や人的支援については、企業との連携が有効である。プログラミング教育に対する不安を解消するためにも、学校への情報提供はしっかりとしてほしい。子どもたちが遊び等を通じて身近にプログラミングに馴染んでおり、プログラミング教育に対するハードルは、大人が想定するより低いと思われる。
- 論理的に考えた物事が再現できるということや、アクティブ・ラーニングの良い教材として活用できることがプログラミング教育の強みである。社会に数多く存在する「答えのない課題」に向き合うためのロジカルシンキングを身に付けるにも有効である。教員がこれらの趣旨を理解して教えることで、子どもたちの本質的な学びにつながる。
- 日常のすべての授業においてプログラミング的思考を育むことができる。教員がこの点に留意して、日々の授業に向き合う姿勢が大切である。
- ICT機器の整備が不十分であることが、教員のモチベーションの低下や、プログラミング教育に取り組むことができない理由となり、結果的に、子どもたちが十分なプログラミング的思考を身に付けることができないということになってはならない。地方交付税措置されているのに整備が進んでいないことは、子どもたちに影響を及ぼすことになる。

以上